



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長。1995年に尼崎市で開業した長尾クリニックを65歳になる6月末で卒業。今後新たな形で医療に携わっていく。24日には神戸で「卒業ライブ」を決行。詳しくは長尾和宏オフィシャルサイトに。

医療界のドン、芸能界のドン：どこの業界にも「ドン」と呼ばれる人がいます。イタリア・スペイン地方で貴族の男性につける尊称だったものが、いつしか日本では、親分格の実力者に付けられる綽名となりました。そういえば先日僕は、『ハマのドン』という漫画(すじ)いドキュメンタリー映画を観たばかり。

「参院のドン」と言えばこの人でした。自民党参院議員で官房長官など要職を歴任した青木幹雄さんが6月11日、神奈川県内の施設で亡くなりました。享年89。死因は老衰との発表です。

青木氏は2010年に政界を引退しましたが、訃報は各局のニュース番組で大きく取り上げられています。引退して13年もたっているのにこれほどの影響力を持っているとはさすが「ドン」。

長男である青木一彦参院議員

309 元官房長官 青木幹雄



は、「大型連休が過ぎてから体の調子を崩し、病院で過ごしていたんだん食も細くなっていた。家族で見送ることができ、本人も思いません。老衰とは、基礎疾患のない高齢者の枯れるような最期。僕

は平穏死と呼んでいます。寿命が尽きる1〜2週間前から食べる量が徐々に減っていき、最後の数日間はずかな水分程度しか受け付けない状態になります。「食べられない」のではなく「もう食べる必要がない」のです。重要な臓器の機能が弱ってきているので、自然なこと。好物や水分を少し舐めるだけでもしばらく維持できます。

しかしご家族によっては、なんとか少しでも食べさせたい!と躍起になります。徐々に食べなくなる人をたまた見守るのは不安です。だけど、無理やり食べさせても何もないことはない。かえって体に負担を掛け苦しめることにもなりかねません。「このまま自然に経過を見守りませんか」と提案しても、どうしても家族が諦めきれず、胃ろうやEVDポートからの人工栄養を希望されることがよくあります。「どんなことをしても愛する人に一日でも長く生きてほしいと思うのは家族として当然でしょう?」と言つ人もいます。でも水分や栄養を無理やり入れると溺れるように苦しみ、死期を早めます。

青木さんがリビンゲウイルを書いていたかはわかりませんが、本人の意思や希望に理解があるご家族に見守られて自然に穏やかに旅立たれたように思いました。

島根県出身の青木さんを、鳥取県出身の石破茂さんはこんな言葉で悼んでいます。「我々山陰人として、山陰の思いを全身全霊で体現しておられた方だと思えますね」自分のことは後回しで常に組織の調整役に回り、国を思い、義理人情を重んじる人。それが真のドンの定義なのかもしれません。

真の「ドン」の定義とは